

明治期の兵語辞書について (四)

— ドイツ語を中心にして —

信 岡 資 生

8 和獨兵語辞彙

1

わが国最初の「和獨兵語辞典」であり、また「和獨兵語辞典」と銘打った辞典は、本書の他にはただ一点、後述する兵藤三郎著『最新和獨兵語辞書』（兵事雑誌社 明治45年）が刊行されているのみである。

一般の和獨辞典も、和獨辞典に比べると数は少なく、明治に入って本書以前（明治42年12月まで）に出版された和獨辞典は25点を数えることができるのに対し、和獨辞典は次の4点にとどまる¹⁾。

和獨對譯字林 律多留富勒曼校定 齋田訥於 那波大吉 國司兵六著
述 日比谷健二郎 加藤翠溪出版 明治10年10月

新撰和獨字彙 山脇 玄校閲 パウル・エーマン補正 平塚定二郎
宍戸深藏 塚本明籌合著 三河屋書店 明治28年8月

新和獨辭典 登張信一郎 大黒安三郎 山田 基著 大倉書店 明治
34年11月

會話作文實例挿入和獨新字林 國吉直藏著 獨逸語學雜誌社 明治35年
9月 改訂増補版 東京武藏屋書店發行 明治40年8月

この他に和獨辞典の範疇には入らないが、下記の単語・語彙集がある。

和獨對照單語篇 獨逸語學雜誌社 明治35年9月

和文獨譯練習「附」和獨字彙 山川幸雄著 丸善 明治42年9月

明治期の兵語辞書について (四) —— ドイツ語を中心にして ——

なお医学専門用語辞典には、本書以前にも、和語を見出しとし、対応外国語にラテン語、ドイツ語、英語を挙げる下記のものがあった²⁾。

懐中和羅獨英醫學辭典 日高 昂著 南江堂 明治 32 年 11 月

日獨羅醫語新字典 大島 樸著 吐鳳堂 明治 39 年 5 月

和獨羅對病名字典 附録診療上慣用語 寺尾國平著 南江堂 明治
40 年 2 月

『獨逸語學雜誌』第 12 年第 6 号 (明治 43 年 2 月 1 日発行 獨逸語學雜誌社) の裏表紙に、『和獨兵語字彙』の新刊広告が掲載されている (図 1)。
広告文は次の通りである。

陸軍大學校教授 司馬亨太郎 共編

陸軍大學校教授 高田善次郎

新刊 和獨兵語字彙 全一冊

正價金七拾五錢 郵税金六錢

本書は戰術語戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵語、經理其他人馬衛生等の術語を網羅したれば軍人の獨逸文を綴るには最も缺くべからざる良書なり

東京市麴町區飯田町五丁目廿番地

發行所

精華書院

振替口座東京四三六六號

この広告文から、また後で紹介する著者の序文のことばから推してみると、本書はもっぱらドイツ語を学ぶ軍人を対象に編纂されたものであると言える。

また同誌第 12 年第 8 号 (明治 43 年 4 月 1 日発行) の奥付頁には、広告の形式は変更されたが、内容紹介文は、始めが「本書は司馬、高田兩教授が多年の苦心によりて編纂されたるものにして」と変わっただけで、「戦

図 1

陸軍大學校教授 司馬亨太郎
陸軍大學校教授 高田善次郎

共編

新刊 和獨兵語字彙

全一冊

正價金七拾五錢

郵税金六錢

本書は戰術語戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵語、經理其他人馬衛生等の術語を網羅したれば軍人の獨逸文を綴るには最も缺くべからざる良書なり

東京市麴町區飯田町五丁目廿番地

發行所 精華書院

振替口座東京四三六六號

図 2

陸軍大學校教授 司馬亨太郎
陸軍大學校教授 高田善次郎

共編 新刊

和獨兵語字彙

全一冊 正價七拾錢 郵稅四錢

本書は可馬、高田兩教授が多年の苦心によりて編纂されたるものにして戰術語戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵語經理其他人馬衛生等の術語を網羅したれば軍人の獨逸文を綴るには最も缺くべからざる良書なり

獨逸語單雜誌及び辨院發行書に對し代金御拂込の節は左の件々に御注意被下度候

○郵價爲替には受取人欄内に東京市麴町區飯田町五丁目廿番地 精華書院 又郵便所指定の場合には飯田町通町郵便局と御記入ありたりし但し小爲替等郵便局及び受取人指名の必要なものは是れ御記入なきを便利と致し候

○書籍注文の節代金引換小包にて送本御希望の方有之候へ共送本料厚紙封筒者の不利を不助のみならず萬一御引取無之場合に於て送本料の損失に歸し双方の不便に候而今後代金引換小包送本は一切取扱ひ不申候而御注文の節は爲替又は郵便爲替へ御拂込被下度候

○振替貯金口座(東京四三六六番)は各郵便局にて取扱ひ申候加入名義は精華書院に候

○郵券代用は一割増に御座候
○御注文書につき御問合せの場合には必ず往復はきにて願上候

東京市麴町區飯田町五丁目貳拾貳番地
精華書院

電話 番町一七五七番
振替口座東京四三六六番

術語戦略語は勿論…」以下は上掲と同文の広告が掲載されている (図2)。どちらも書名が『和獨兵語字彙』であり、『和獨兵語辭彙』ではない。本書刊行後の同誌第14年第1号 (明治44年9月1日発行) の巻末広告でも「和獨兵語字彙」であるが、当時は一般に、特に書名の漢字の用い方には鷹揚であったことは、前に「6 獨佛和兵語字彙」の項で注記した通りである (『明治期の兵語辞書について (三)』注3) 参照。

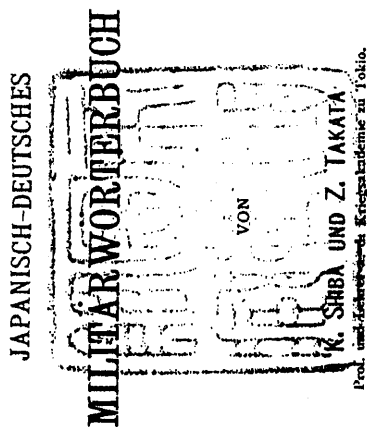
注

- 1) 『日独二言語対訳辞書総覧 総目録1』 (成城大学「経済研究」第134号所載) 参照。
- 2) 『日独二言語対訳辞書総覧 総目録3』 (成城大学「経済研究」第136号所載) 参照。

2

国会図書館収蔵のものは、大きさは、縦15,1cm, 横8,5cm, 厚さ1cmで、左開き。萌黄色の表紙には上部に右から左へ横書きで「司馬亨太郎 高田善次郎」の名が二行に記されて左端に「譯篇」の文字が縦書きされ、中央には「和獨兵語辭彙」と大きく縦書きがあつて、下段にはまた右から左へ横書きで「東京精華書院發行」と記されているが、「東京」と「發行」は縦書きされている。

扉は左頁が和文で、縦に3行、左欄から 陸軍教授 陸軍大學校教官 司馬亨太郎 陸軍教授 陸軍大學校教官 高田善次郎共編 || 和獨兵語辭彙 || 精華書院藏版 とあり、右頁には独文で JAPANISCH-DEUTSCHES/ MILITÄRWÖRTERBUCH/ von/ K. SHIBA UND Z. TAKATA/ Prof. und Lehrer a.d. Kriegsakademie zu Tokio./ ERSTE AUFLAGE./ TOKIO, 1909./ VERLAG VON SEIKWASHOIN. と記されている (図3)。



ERSTE AUFLAGE.

TOKIO, 1909.

VERLAG VON SEIKWASHOIN.

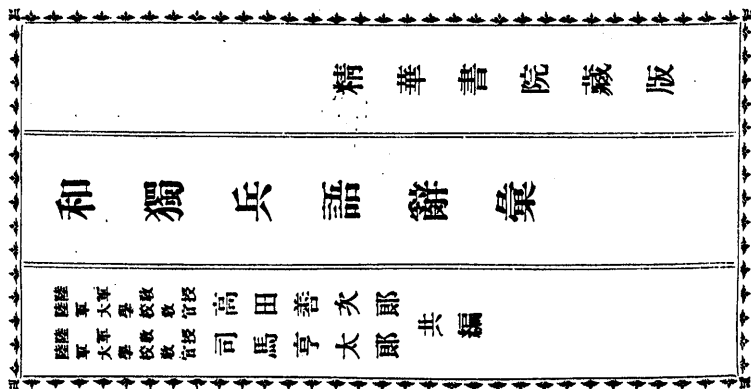


図 3

次頁が以下の独文の序文である (図 4)。

VORWORT

Hiermit übergeben Verleger und Verfasser der Öffentlichkeit ein neues japanisch-deutsches Militärwörterbuch in der Meinung, daß der Augenblick einem solchen Unternehmen günstig sei; sind doch seit der Herausgabe des Werkes von Fujiyama und Takata eine Reihe von Jahren verflossen, große Ereignisse gaben den Anstoß zu mancherlei Neuerungen im Heerwesen, die Militärtechnik hat sich, wie die letzten Friedensübungen der Hauptmächte auffallend zeigten, in ungeahntem Schritte weiter entwickelt, der auch der militärischen Fachsprache seine Spuren eindrücken mußte.

„Rast' ich, so rost' ich“; die Armee hält, seit der Kanonendonner von Port Arthur und Mukden verhallte, das Schwert blank, um, eingedenk der gnädigen Worte, die S. Majestät der Kaiser nach der großen Heerschau am 30. April 1906 kundgab, jederzeit völlig bereit zu sein, sobald es Wohl und Ehre des Landes erfordern sollten, zu den Waffen zu greifen.

Einer der hervorragendsten Soldaten des neunzehnten Jahrhunderts, Kaiser Wilhelm I., hat einmal gesagt, beim Militär gebe es keine Kleinigkeiten. Indem wir also unsere militärischen Ausdrücke möglichst vollzählig und sinnentsprechend in deutscher Sprache vorzulegen bemüht waren, möchten wir denjenigen Offizieren und Schülern an die Hand gehen, die, von den Exerzierplätzen heimgekehrt, im Studierzimmer an der Vermehrung ihres Wissens mit jener minutiösen Gründlichkeit arbeiten, welche, wie auch der letzte Krieg der Welt bewiesen hat, allein zu durchschlagenden Erfolgen führt.

DIE VERFASSER.

Tokio, im Winter 1909.

和訳すれば以下のようになる。

ここに出版者と著者は新たな和独兵語辞書を世間に送る。かかる企画にとって今がその好機と考えてのことである。なにしろ藤山・高田両氏の辞典の刊行以来既に多年が経過したことであり、数多の事件が契機となって軍事においてさまざまな改革が行われ、最近の列強の平時演習が如実に示す如く軍事技術は予期せぬ速度で発達を遂げて、軍事専門語にもその痕を残しているからである。

「休めば身体に錆びが付く」。旅順口や奉天の砲声が止んで以降も、天皇陛下が一九〇六年四月三〇日の大閱兵式後に宣われたお言葉を肝に銘じて、何時なりとも国家の安全と名誉の為に必要とあれば直ちに武器を取るべく準備万端を整えて軍は待機し剣は磨かれている。

一九世紀の最も傑出した兵士の一人である皇帝ヴィルヘルム一世は嘗て、軍事に細事なしと言った。されば我々は、我が軍事用語を可能な限り数多くそろえ、正しく相当する意味のドイツ語にすべく努めることで、練兵場から帰営するや演習室で、綿密徹底の精神をもって——そのみが先の戦争が世界に実証したように圧倒的な成果をもたらすのであるが——知識の増加に励む士官や生徒の力にならんと願うものである。

著者一同

東京 明治四十二年 冬

序文注

Rast' ich, so rost' ich. : 休めば錆付く ; 怠惰は心身を鈍くす

Port Arthur : 旅順 ; 中国遼東半島南部の黄海に臨む港の英語名

Mukden : 奉天 ; 現在の中国の都市瀋陽 ; 日露戦争の会戦場

die große Heerschau am 30. April 1906:

明治 39 年 4 月 30 日、日露戦争の戦勝を記念して、凱旋大観兵式が東京青山練兵場で行われた。当日朝明治天皇は将兵 3 万 1 千 2 百 3 人の閲兵を終えたのち、指揮官大山元帥に対し次の勅語を宣した。

朕茲ニ凱旋軍ノ集合シテ親シク觀兵式ヲ擧ケ軍紀大ニ振ヒ隊伍克ク整フヲ認メ朕深ク之ヲ憐フ汝等益々奮勵シ以テ帝國陸軍ノ發達進歩ヲ期セヨこれに対し大山元帥は次の通り奉答した。

陛下茲に凱旋軍を親閲あらせられ特に優温なる勅語を賜る臣等感激の至りに堪えず益々奮勵努力以て聖旨に副ひ奉らん事を期す凱旋軍を代表して謹んで奉答す

明治卅七八年戦役凱旋式

諸兵指揮官元帥陸軍大將 大山 巖

(以上は東京朝日新聞 明治 39 年 5 月 1 日付 による)

Kaiser Wilhelm I.: 1797-1888. プロイセン王として軍国主義の方策を進め、統一なったドイツの初代皇帝となった。在位 1871-1888。

3

編者の一人司馬亨太郎は、我が国最初の独和辞典の一つ『和譯獨逸辭典』(東京春風社合著 明治 5 年 10 月)の編者の一人司馬凌海(盈之)の一人息子で、文久 3 年(1863)平戸で生まれた。『明治過去帳』³⁾の司馬盈之の項目に「平戸の医生岡口等傳の長女を配偶者とす。その子、享太郎を養嗣となす」と記載されているのは、凌海が平戸藩医岡口家の女婿となり一子をもうけたことを知った凌海の祖父伊右衛門が、急遽はるばる平戸へ赴き、離縁させて凌海を故郷の佐渡へ連れ戻した経緯があるからである。凌海の手許に引き取られた息子は、少年の頃から、大学東校(東京大学医学部の前身)の教授として招聘されていた Dr. Hoffmann⁴⁾の家に住み込みでその夫人からドイツ語を習い、14 歳で父の経営する春風社で独習字を教えた。やがて父の医業を継ぐべく医科大学の予備門に入り、途中から大学東校に転じた。20 歳のとき明治 16 年 3 月山口中学にドイツ語教師と

して赴任、東京に戻って東京大学御用掛から明治18年獨逸学協会学校の教師となった。明治21年同校の校長桂 太郎に推されて陸軍大学教授となる。大正4年獨逸学協会に戻り、中学の教頭から理事、さらに昭和4年5月第8代獨協中学校長となり昭和11年2月病没した⁵⁾。(図5)

彼の名前「キョウタロウ」について付言すれば、上で引用した『明治過去帳』の記載でも、また山本修之助著『司馬凌海』(司馬凌海先生顕彰会発行 昭和42年9月)でも享太郎としている。(株)日本図書センターが1987年10月に覆刻した『明治人名辞典 下巻』(底本古林亀治郎篇・発行『現代人名辞典』第二版 大正元年 中央通信社)では「司馬亨太郎 君は陸軍大學教授にして、高等官四等たり。豊多摩郡澁谷町上澁谷五二。」とあるが、上巻の目次(さくいん)では司馬享太郎となっている。亨も享も、各種の漢和辞典によれば城門の象形で、共に元は「さわりなく通ずる」の意であるが、「のち亨と享を区別して、亨は「とおる」、享は「うける」意に用いる」(貝塚茂樹・藤野岩友・小野 忍編『角川漢和中辞典』昭和34年)という。『獨協学園史 1881-2000』(獨協学園百年史編纂委員会編著)では一貫して享太郎としており、本稿では辞典の表紙・扉及び奥付に記された亨太郎を用いることにする。

もう一人の編者高田善次郎は、前稿『明治期の兵語辞書について(二)』で取上げた「5 獨和兵語辞書」の藤山治一との合著者である⁶⁾。彼の兄に、『獨逸語學雜誌』を創刊した学習院教授大村仁太郎(のちに第4代獨協中学校長)がいる。高田善次郎は慶応2年(1866)生まれ、「初め東京外国語学校の仏語学科に学び、のち私立獨逸学校、獨逸学協会学校で獨逸語を修め(明治35年別科卒)、陸軍省工兵局、陸軍戸山学校等で独仏の兵書の翻訳をし、のち第二高等学校教授となり、さらに獨逸学協会学校、学習院、陸軍大学に奉職し、獨逸語教授をしていた。また辻 高衡との共著『獨逸會話教科書』、『獨逸詩文詳解』や藤山治一と共著『獨和兵語辞書』などの著作を残している」。彼は「極めて直情径行の人で奇行に富んでいた」と

VORWORT.

Hiermit übergeben Verleger und Verfasser der Öffentlichkeit ein neues japanisch-deutsches Militärwörterbuch in der Meinung, daß der Augenblick einem solchen Unternehmen günstig sei; sind doch seit der Herausgabe des Werkes von Fujiyama und Takata eine Reihe von Jahren verflossen, große Ereignisse gaben den Anstoß zu mancherlei Neuerungen im Heerwesen, die Militärtechnik hat sich, wie die letzten Friedenstübungen der Hauptmächte auffallend zeigten, in ungeahntem Schritte weiter entwickelt, der auch der militärischen Fachsprache seine Spuren eindrücken mußte.

„Rast' ich, so rost' ich“; die Armee hält, seit der Kanonendonner von Port Arthur und Mukden verhalte, das Schwert blank, um, eingedenk der gnädigen Worte, die S. Majestät der Kaiser nach der großen Heerschau am 30. April 1906 kundgab, jederzeit völlig bereit zu sein, sobald es Wohl und Ehre des Landes erfordern sollten, zu den Waffen zu greifen.

図 4



図 5

司馬亭太郎
〔「独協学園史」より〕

いう⁷⁾。(図6)

注

- 3) 大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』(東京美術刊 昭和10年 原著 私家版 昭和46年11月新訂初版)
- 4) Theodor Eduard Hoffmann 1837-?. 明治3年2月の北ドイツ連邦公使フォン・ブランドと明治新政府との間に交わされた約束によって、3年間の契約でプロイセンから来日した医学教師2名の中の1人。ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム軍医学校で内科学を学んだ海軍軍医将校で、外科学の陸軍軍医将校ミュラー (Leopold Müller) と共に明治4年8月23日夫人同伴で横浜到着、司馬凌海が通訳した。大学東校(後の東京大学医学部)で内科学を担当し、ドイツ式医学教育制度の成立に力を注ぎ、脚気の治療法研究に尽力した。「ミュルレルとホフマンの東京における住居は、上野車坂の上の四軒寺の北から二番目の見明院であった。玄関に入って左の半分をミュルレルが使い、右の半分をホフマンが用いていた。玄関の突当りの室に日本人少年がそれぞれ従者一人を連れて住んでおり、新米の教師からドイツ語を修めるのが目的であって、その二人は岩佐純の息子新(当時八歳)と司馬凌海の息子亨太郎(当時十歳)であった。ホフマン夫人がもっぱらそのドイツ語教授をうけもっていた。ミュルレル夫人はフランス人であった」(石橋長英・小川鼎三著『お雇い外国人⑨医学』鹿島出版会 昭和44年 91頁)。ホフマンは任期切れの明治7年秋に契約を更新し、宮内省お雇い兼医学校の教師となり、明治8年秋離日し、故国に帰ったが、その後のことは不明。
- 5) 『山岸光宣監修 高等ドイツ語講座 Blätter des höheren Kursus der deutschen Sprache 第二號 高屋為雄編輯 獨逸語研究社発行 昭和3年1月』所載(265-277頁)の「司馬亨太郎 日本に於ける獨逸語教授史」、山本修之助著『司馬凌海』(司馬凌海先生顕彰会発行 昭和42年9月)、熊本大学の上村直己教授著『陸軍大学校ドイツ参謀将校の通訳官たち』(熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第23号:167-184頁 1988)などによる。但し、『獨協学園史 資料集成』(獨協学園百年史編纂委員会編著 学校法人獨協学園発行 2000年5月)の獨協専任教員名簿によると、番号152の司馬亨太郎は大正7年就任、昭和2年退職となっ

ており、その備考欄には「独語教師、第8代校長、陸大教授、語学天才の洋学者司馬凌海(1839~79)の息子。近代日本ドイツ語教育の「軍国」の雰囲気をもつ」と記載されている。

- 6) 『明治期の兵語辞書について(二)』(成城大学「経済研究」第163号125~126頁参照。
- 7) 『獨協学園史 1881-2000』(獨協学園百年史編纂委員会編著 学校法人獨協学園発行 2000年5月)594~595頁。なお、上注5)の『獨協学園史資料集成』の卒業生名簿(1889-1963)によれば、明治25年専修科卒業(第5回卒業生)21名と並ぶ別科2名の中に高田善次郎の名が見え(2頁)、その職名称号等の欄には「陸軍大学教授(独語)倫理学者」と、また住所、備考その他の欄には「大村仁太郎校長弟「独逸会話教科書」「独逸俚諺詳解」「独逸短編叢書」「和独兵語辞彙」「独和兵語辞書」著者」との記載がある。また同書の獨協専任教員名簿では、高田善次郎は明治35年就任、明治40年退職となっていて、備考欄には「倫理・独語教師、明治25年別科卒、大村仁太郎弟、陸軍教授、「教育倫理学者として一世を風靡」(齊藤博)」との記載がある(218頁)。

4

独文の序文にはすぐ本文が続き(図7)、「凡例」に相当する頁がないので、本辞書の記述法は本文から推測するしかない。

本文は、横組み1頁33行、256頁あって、附録の文法表・不規則動詞変化表などもなく、257頁に相当する頁が奥付となる。見出し語を1頁当たり30とみると、全体で約7,500語の見出し語を収めていることになる。見出しの和語はローマ字表記で、大文字で書き始めて太字、配列は表記のローマ字のABC順に並ぶ。ローマ字見出しの直後に、**Shiki**、式;**Shiki**、志気;**Shiki**、指揮 というように、漢字(カタカナ混じり)を併記して、同音異義語の多い日本語を区別し、誤解を防止している(図8)。

例：**Jūshō**、重症，schwere Krankheit.

Jūshō、重傷，schwere Verwundung.

Abu (I) Aug

Abum. (Schi) bogen 矢
 -gen. 射, (Steig) bingetinken 照.
 -we. 射; 1 1 下ノル, den Biegel
 setzen.
 -we. 射; 1 1 子 撃メス, den Biegel
 bin-
 Aco 射 1 1 射 銃, das Gewehr über
 Agok 射 3 3 銃, 銃, Kinnstück 射.
 Agok 射 1 1 銃, Kinnkette 射, | landskappe 射.
 Alko 射 射 射, Patriotismus 射, Vater-
 Alro, 射, Wehgehe 射, Hohlsch 射, Dache 射.
 -so no 射, 1 1 後ノ布解, Aufstellung 射,
 hinter dem Defilee.
 -k4, 1 1 口, Eingang 射, des Deflees.
 -shinshutsu, 1 1 渡出, Debouchieren 射, (od.
 Herauskommen, Hervorberechen) aus dem Defilee.
 -zen no fejin, 1 1 前ノ布解, Aufstellung 射,
 vor dem Defilee.
 Aiy6, 射 射, aus Landbewohnern gewortene
 Schützmannschaft in Formosa.
 -sen, 1 1 線, Aufstellungslinie 射, der ein-
 heimischen Mannschaften in Formosa.
 Aist, 合 圖, Signal 射.
 Amsoel, 雨 蓋, Regenmantel 射.
 Ambel, 鞍 尾, Sattelende 射.
 Ambu, 鞍 部, Sattel 射, (eines Beiges).
 Ampel, 鞍 皮, Sattelpelz 射. | Lösungsziffer 射.
 Ang6, 暗 號, Geheimschrift 射, Lösungswort 射,
 -densham, 1 1 電信, geheime Depesche, Ziffer-
 depesche 射, Z.-telegramm 射.

図 7



図 6
 高田善次郎
 (「独協学園史」より)

Jūshō, 銃傷, *s.* **Jūsō** 銃創

Jūshō, 銃床, *Gewehrschaft m.*

Shinchō, 深長, *Tiefe f.*

Shinchō, 身長, *Größe f.*

-ni ōjite, | | 二應ジテ, *nach der Körpergröße.*

Shinchō, 伸暢, *Erweiterung f.*

-suru, 伸暢スル, *erweitern.*

-kakeashi, | | 駈歩, *voller Laufschrift.*

見出しの和語に対応するドイツ語はラテン字体、名詞は頭字を大文字とし、その性を男性名詞 *m*、女性名詞 *f*、中性名詞 *n* で示すが、発音や格変化や複数形は記載されていない。動詞についても同様で、他動詞・自動詞の区分もつけていない。見出し語に始まる、もしくは終わる複合見出し語は、行を改め、頭を1字下げてそれぞれの見出し語の下に続けて記載するが、見出しの漢字は1字を|と略している。

例：**Shidan**, 師團, *Division f.*

-chō, | | 長, *Divisionskommandeur m.*

=kwaigi, | | | 會議, *Rat m. der Divisionskommandeure.*

Hohei, 歩兵, *Infanterie f.*, *Fußvolk n.*, *Soldat zu Fuß*, *Fußgänger m.*

senretsu-, 戰列 | |, *Linieninfanterie f.*

-butai, | | 部隊, *Infanterie-Truppenteil m.*, *I. abteilung f.*

-chūtai, | | 中隊, *Kompagnie f.*

=chō, | | | 長, *Kompagnie-Chef*, *K. führer m.*

=sharyō, | | | 車輛, *Kompagnie-Fahrzeug n.*

第1頁を例示すれば、以下の通りである。

A

Abumi, 鏡, (Steig) bügel *m.*

—**gawa**, | 革, (Steig) bügelriemen *m.*

—**wo sageru**, | ヲ下ゲル, den Bügel herabsetzen.

—**wo shimeru**, | ヲ緊メル, den Bügel festbinden.

Age tsutsu! 上ゲ銃, „das Gewehr über!“

Agokawa, 腮革, Kinnstück *n.*

Agokusari, 腮鎖, Kinnkette *f.*

Aikokushin, 愛國心, Patriotismus *m.*, Vaterlandsliebe *f.*

Airo, 隘路, Wegeenge *f.*, Hohlweg *m.*, Defilee *n.*

—**go no fujin**, | | 後ノ布陣, Aufstellung *f.* hinter dem Defilee.

—**kō**, | | 口, Eingang *m.* des Defilees.

—**shinshutsu**, | | 進出, Debouchieren *n.* (od. Herauskommen, Hervorbrechen) aus dem Defilee.

—**zen no fujin**, | | 前ノ布陣, Aufstellung *f.* vor dem Defilee.

Aiyū, 隘勇, aus Landbewohnern geworbene Schützmannschaft in Formosa.

—**sen**, | | 線, Aufstellungslinie *f.* der einheimischen Mannschaften in Formosa.

Aizu, 合圖, Signal *n.*

5

本書が使用するローマ字表が掲載されていないが、ヘボン式と見られる。念のため本書で使用のヘボン式綴りを掲げると次の通りである。

明治期の兵語辞書について (四) — ドイツ語を中心にして —

清音	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko
	サ sa	シ shi	ス su	セ se	ソ so
	タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te	ト to
	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
	ハ ha	ヒ hi	フ fu	ヘ he	ホ ho
	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
	ヤ ya	イ i	ユ yu	エ e	ヨ yo
	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
	ワ wa	ヰ i	ウ u	エ e	ヲ wo
	ン n				
濁音	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go
	ザ za	ジ ji	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo
	ダ da	ヂ ji	ヅ zu	デ de	ド do
	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo
半濁音	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po
拗音	キヤ kya	キュ kyu	キョ kyo		
	シャ sha	シュ shu	ショ sho		
	チャ cha	チュ chu	チョ cho		
	ニヤ nya	ニユ nyu	ニョ nyo		
	ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒョ hyo		
	ミヤ mya	ミュ myu	ミョ myo		
	リヤ rya	リュ ryu	リョ ryo		
	ギヤ gya	ギユ gyu	ギョ gyo		
	ジャ ja	ジュ ju	ジョ jo		
	ヂヤ ja	ヂユ ju	ヂョ jo		
	ビヤ bya	ビユ byu	ビョ byo		
	ピヤ pya	ピユ pyu	ピョ pyo		
	クァ kwa				
	グァ gwa				
撥音	b, m, p の前で m, それ以外は n				
促音	次にくる最初の子音字を重ねる, ただし c の前は t				
長音	母音字の上に ˉ				

ヘボン式ローマ字とは、ペンシルヴァニア生まれの米人医師 J・C・ヘボン (James Curtis Hepburn 1815-1911) が、横浜の外人居留地にある自分の屋敷で売り出した本邦最初の本格的和英辞典『和英語林集成』 (Japanese and English Dictionary. 1867) の中で、和語の音を英字で表すために用いた表記法である。ヘボンはこの辞典に手を加え、第二版を明治 5 年 (1872)、さらに第三版『改正増補 和英英和語林集成』を明治 19 年 (丸善 1886) に出版したが、ヘボンが初版で用いた表記方式は、その間に明治 18 年に設立された羅馬字會が修正して『羅馬字にて日本語の書き方』 (1885) として発表したものに依っていた。明治初年からこの頃までに作られた和英辞典、和独辞典は、いずれもこのヘボンの表記法を採っている。明治 38 年設立の『ローマ字ひろめ會』の「標準式」(日本式、さらに訓令式の元となった) はまだ普及していなかった⁸⁾。

一般に和独辞典が日本人の使用者を念頭において作成されたとすると、見出し語の表記をなぜ仮名あるいは漢字にしなかったのか、疑問とされる場所である。ヘボンの『和英語林集成』は、日本語の研究を意図して作成されたもので、対象は日本人よりも外国人であったように思われ、もっぱら日本人が該当する英語を求めるために用いる今日の和英辞典とは目的が違っていた。しかしその後の和英辞典は — 和独も和仏も — みなこれに倣って見出しをローマ字表記とした。昭和も第二次世界大戦後になって、相良守峯編『和独』(三修社 昭和 32 年) は、ヘボン式による見出し語の表示ながら、当用漢字による見出し語の一括という新しい編纂方式を採用したが、見出し語表記にローマ字を使用しない、かな引き五十音順配列の画期的な和独辞典『郁文堂和独辞典』(富山芳正・三浦勲郎・山口一雄編 郁文堂) は、ようやく 1966 (昭和 41) 年に誕生した。和独辞典の見出し語表記に関しては、別に稿を改めて考察することにした。

本書『和獨兵語辞彙』は軍人を対象に、特に軍部の中であって将来を嘱望され、本人もまた栄達を願い、軍事学の研究に勤しむインテリ青年将校

を対象に編集・作成されたものであり、彼らにとっては、ローマ字表記はさほど苦にならなかったであろう。

本書のローマ字表記では、切れ目に - が入れている。

例：**Ban-ei**, 輓曳, Ziehen *n.*

I-nyō, 圍繞, Einschließung, Zernierung, *Umfassung f.*

Jin-ei, 陣營, Lager, *n.*

Jin-in, 人員, Personal *n.*, Etat *m.*, Stärke *f.*

Zan-yo, 殘餘, Rest, Überrest *m.*

注

- 8) ローマ字の表記方式については、下記のインターネット・ページが参考になる。<http://www.halcat.com/roomazi/iroiro1.html>

6

見出し語は圧倒的に名詞であるが、他の品詞も見受けられる。

動詞例：

Appaku suru, 壓迫スル, abdrängen, zurückdrängen

Chiri wo shimeru, 地利ヲ占メル, Vorteil *m.* des Geländes gewinnen.

Fūin suru, 封印スル, plombieren.

Ippakusuru, 一泊スル, übernachten.

Meizuru, 命ズル, befehlen, einen Befehl geben (od. erteilen), (an-)ordnen, abkommandieren.

Mizukau, 水飼フ, tränken.

Ubau, 奪フ, erobern, sich bemächtigen, wegnehmen, einnehmen,

in Besitz nehmen.

形容詞例：

Saikosan no, 最古参ノ, rangältest.

副詞例：

Atoe! 後へ, „Kehrt Marsch!“

Migi, 右, rechts.

Saigwai, 最外, äußerst.

命令の見出し例：

Maware, migi! 廻レ右!, „Rechts um!“

Tsuke ken! 著ケ劍, „Seitengewehr pflanzt auf!“

Tsumekata! 填メ方, „Geladen!“

Ute! 打テ, „Feuer!“

Uchikata! 打方, „Feuer!“

—**mate!** | | 待テ, „Halt mit Feuer!“

—**yame!** | | 止メ, „Gewehr in Ruh!“

固有名詞は少ない。例：

Fufutsu sensō, 普佛戦争, Deutsch-französischer Krieg.

Hōten kwaisen, 奉天會戰, Schlacht *f.* bei Mukden.

Junebu jōyaku, 活那伯條約, Genfer Konvention *f.*

Kabafuto shubitai shireikwan, 樺太守備隊司令官, Kommandeur
m. der Besatzung auf Sachalien.

Kaikōsha, 偕行社, Name des Offizierskasino *n.*

—**kiji**, | | | 記事, Zeitschrift *f.* des Kaikosha.

Nisshin sen-eki, 日清戦役, japanisch-chinesischer Krieg.

Shinkoku chūtongun, 清國駐屯軍, Besatzungstruppen in China.

Yūshūkwan, 遊就館, Name des Kriegsmuseums zu Tokyo.⁹⁾

因みに東京は次の3見出しがある。

Tōkyōeiju shotai, 東京衛戍諸隊, Garnisons- (od. Besatzungs-) truppen *pl.* in Tōkyō.

Tōkyōwan bōgyo sōtoku, 東京灣防禦総督, Chef *m.* des Verteidigungskomitees des Hafens von Tōkyō.

Tōkyōwan yōsaishireikwan, 東京灣要塞司令官, Kommandant *m.* der Festung am Hafen von Tōkyō.

外来語は極めて少ない。例：

Barakku, 「バラック」 Baracke *f.*

Meitoru, 米突, Meter.

Merinitto, メリニット, Melinit.¹⁰⁾

Saberu, サーベル, Säbel *m.*

Zekken, ゼツケン, Satteldecke, Schabracke *f.*¹¹⁾

当時の軍隊特有の用語と思われる例の幾つかを挙げてみよう。

Hampōfu, 飯包布, Wickeltuch *n.*

Hohi, 方匙, Beilpicke. *f.*

Kinsen, 金線, Draht *m.*

Kōbun, 口分, Portion *f.* und Ration *f.*

-ryōshoku, 口糧食, Mundverpflegung *f.*

Imbajō, 飲馬場, Tränke. *f.*

Imbajo, 飲馬所, Tränkanstalt *f.*

Jūshōpan, 重焼麵麩, *s.* Nidoyakipan.

Mempō, 麵麩, -kōryō, 口糧, Brotportion *f.*

-shu, 手, Bäcker *m.*

Mengō, メン盒, Reisbehälter *f.*¹²⁾

Mongō, 問號, Losungswort *n.*

Sanchira, サンチラ, Säbelgehänge *n.*, S. koppel.¹³⁾

Yōsen, 陽戰, Scheinmanöver, Scheingefecht *n.*, Demonstration *f.*

Zemba, 駉馬, unverschnittenes Pferd.

Zenkeishu, 全形舟, Ponton *m.*

今日とは違った古い言い方,あるいは文語体と思われる見出し語例:

Bahitsu (od. **Bahiki**), 馬匹, Pferd *n.*

Byōsha, 病者, Kranker *m.*

Chidatsu, 褫奪, Beraubung *f.* der Dekoration.

Fukkyō, 拂曉, Morgendämmerung *f.*, Tagesanbruch *m.*

Ikyū, 醫笈, Sanitätskasten *m.*, Ambulanz *f.*

Jikken, 實驗, Erfahrung *f.*

nichiro seneki no-, 日露戦役ノ | |, Erfahrungen im russisch-japanischen Kriege.

Kau, 河盂, Flußtal *n.*

Kihen, 欺騙, Täuschung *f.*

Kusho, 區處, Anordnung *f.*

-suru, | | スル, anordnen.

Kwankō, 坑工, Ziegel (stein), Backstein *m.*

-kyō, | | 橋, Ziegelbrücke *f.*

-shō, | | 牆, Ziegelmauer *f.*

-tetsudōkyō, | | 鐵道橋, Bahnbrücke *f.* aus Ziegeln.

Sangaku, 算學, Mathematik *f.*

Shitayurumi, 舌寬, Zungenfreiheit *f.*¹⁴⁾

Shubo, 手簿, Notizbuch *n.*

Shuri, 手裏, in der Hand.

-ni yūsuru, | | ニ有スル, in der Hand haben.

-wo dassuru, | | ヲ脱スル, aus der Hand gehen.

Shūtai, 滯滯, Stocking *f.*, Hemmnis *n.*, Aufenthalt *m.*

-suru, | | スル, stocken, hemmen, Aufenthalt haben.

Takuryō, 宅料, Servusgeld *n.*, Wohnungszuschuß *m.*, Mietsentschädigung *f.*¹⁵⁾

Tei-nen, 停年, Dienstalter *n.*¹⁶⁾

—**meibo**, | | 名簿, Rangliste *f.*

—**shinkyū**, | | 進級, Beförderung nach dem Dienstalter.

Toshōkei, 徒小徑, Fußpfad *m.*

Udeshō, 腕章, Armbinde *f.*¹⁷⁾

注

- 9) 靖国神社境内にある武器及び戦役記念品を所蔵する博物館で、陸軍卿山県有朋等の主唱によって明治 14 年完成した。名称の由来は筍子勸學篇「君子居必擇郷遊必就士 クンシハラルニカナラズキョウラエラピアソブニカナラズシニツク」から。
- 10) メリナイト。ピクリン酸を含む強力爆薬。
- 11) ゼッケンは、今日ではスポーツ選手や競走馬が付ける番号布または番号をいうが、Schabracke は華美な織物で織った馬衣のことで、藤山・高田著『獨和兵語辞書』では「鞍被」と訳されている。ゼッケンの由来は不明。『日本国語大辞典 第一版』(小学館 昭和 49 年)では、「ドイツ語の Zeichen が英語を経て入ったものか」、『第二版』(2001)では「ドイツ語の Decke から」とし、一・二版とも「一説に、スカンジナビア地方で牛馬を放牧する際、その首に所有者の名前や番号を付した金属の札をさげたものをゼッケンと称し、これが放牧地付近でスキーを行なうスキーヤーの番号布の呼び名となり、スケート、陸上競技にも使われるようになったともいう」との補注がある。『広辞苑 第五版』(岩波書店 1998)では「(語源に、馬の鞍に敷く毛布の意のドイツ語 Decke の転など諸説あるが未詳)」としている。
- 12) *m.* の誤植であることは明らか。一方では Meshigōri, 飯行李, Reisbehälter *m.* とある。
- 13) サーベルの吊革で、藤山・高田著『獨和兵語辞書』では Säbelgehänge, Säbelkoppel は「革帯、佩革」と訳されている。サンチラの由来は不明。
- 14) 言論の自由 (Redefreiheit) の意味。藤山・高田著『獨和兵語辞書』にも

Zungenfreiheit, *f.* 舌寛 と出ている。

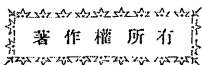
- 15) 今日でいう住宅手当であろうか。
- 16) 旧陸海軍で停年(実役停年)とは、その階級で服務しなければならない最低年限のことで、この年限が経過しなければ上の階級に進級できなかった。例えば、中将4年、少将3年、佐官(大佐・中佐・少佐)2年、大尉4年、中尉は陸軍2年海軍1, 6年、少尉1年であった(大濱徹也・小沢郁郎編『改訂版帝国陸海軍事典』同成社 1995 310頁所載の「陸海軍人実役停年・定限年齢(昭和18年)」による)。従ってドイツ語の在職年数を表す *Dienstalter* を当てるのは誤りである。
- 因みに実役停年名簿は大正初期までは毎年7月1日(その後は9月1日)現在で作成された(原 剛・安岡昭男編『日本陸海軍事典』(株式会社新人物往来社 1997 256頁)。*Beförderung nach dem Dienstalter* は勤務年数に応じた昇進という意味で、旧軍隊でいえば列次(実役停年の多い者順)に順じた昇進、今日のことばでいえば「年功序列」に当たるといえる。藤山・高田著『獨和兵語辞書』の見出し語 *Dienstalter* では「停年順序。古參順序」とあり、*nach dem Dienstalter* には「停年順序ニ仍り」とある。この停年とは別に現役定限年齢があり、これが今日一般的にいう停年(定年)に当たる。参考のため、上記の大濱・小沢書掲載の表による主な階級の定限年齢を記すと、中将62, 少将58, 大佐陸軍55海軍54, 中佐陸軍53海軍50, 少佐陸軍50海軍47, 大尉陸軍48海軍45, 中尉陸軍45海軍40, 少尉陸軍45海軍40であった。以上の数字はいずれも兵科の階級についてであり、部・科が違えば、年齢に多少の相違がみられた。例えば、海軍で軍医や主計将官の定限年齢は少将以下少尉まで各階級とも2年長かった。
- 17) ワンショウでなく。

7

奥付は以下の通り(図9)。

9 図

明治四十二年十二月二十日印刷
明治四十二年十二月廿三日發行



正價金七拾五錢 郵税金六錢

著者 司馬亨太郎
東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷

著者 高田善次郎
東京市牛込區矢來町三番地

發行者 水谷弓彦
東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地

印刷者 野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷所 株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所 精華書院
東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地
電話番町一、七五七番
振替貯金口座四、三六六番

明治四十二年十二月二十日印刷

明治四十二年十二月廿三日發行

著作権所有

正價金七拾五錢 郵税金六錢

著者 司馬亨太郎

東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷

著者 高田善次郎

東京市牛込區矢來町三番地

發行者 水谷弓彦

東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷所 株式會社東京築地活版製造所

東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所 精華書院

東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地

電話番町一、七五七番

振替貯金口座四、三六六番

正価の75銭は、しばしば適当な時期に特価として60銭あるいは65銭で販売している。例えば『獨逸語學雜誌』第16年第11号(大正3年7月1日發行)や第17年第7号(大正4年3月1日發行)の廣告では「正價金七十五錢 特價六十(六拾)錢」,第17年第3号(大正3年11月1日發行)の廣告では「正價金七十五錢 特價六十五錢」である。

辞書を購入する将兵の収入について、大正9年3月の勅令第63号による軍人俸給表によると、主なる階級の俸給は次の通りである¹⁸⁾。

明治期の兵語辞書について (四) —— ドイツ語を中心にして ——

階級	年俸	階級	年俸
大将	7,500 円	中将	5,000 円
少将	4,161 円		
各科大佐	3,146 円 30 銭	中佐	2,394 円 40 銭
少佐	1,649 円 80 銭		
大尉 1 級	1,211 円 80 銭	大尉 2 級	1,095 円
3 級	985 円 50 銭		
中尉 1 級	730 円	中尉 2 級	657 円
少尉	547 円 50 銭	候補生	365 円
准士官 1 級	757 円 20 銭	准士官 2 級	686 円 20 銭
3 級	613 円 20 銭	4 級	540 円 20 銭

以上の将校が年俸であるのに対し、下士官兵は日給である。

階級	日給
1 等下士官 1 級 甲類	1 円 80 銭
2 級	85 銭 68 銭
3 級	72 銭 58 銭
4 級	60 銭 48 銭
兵 1 等兵 甲類	26 銭 21 銭
2 等兵	22 銭 18 銭

発行者となっている水谷弓彦は、国学者水谷民彦の六男として安政 5 年 (1858) 名古屋に生まれた。明治 12 年東京に出て陸軍教導団歩兵科に入隊し、14 年卒業して伍長となり、軍隊に勤務したが、明治 21 年歩兵曹長で除隊、早稲田大学の前身である東京専門学校に入学して、近世文学を学んだ。卒業後、不倒と号し、「錆刀」「薄唇」などの小説を発表する傍ら、「続帝国文庫」の浄瑠璃、脚本類の校訂に携わる。明治 32 年から 38 年まで大阪毎日新聞記者であったが、明治 40 年に精華書院に入社し、月間雑誌『獨

『逸語學雜誌』の発行者兼編輯者となった。『獨逸語學雜誌』の発行者兼編輯者は明治31年10月15日発行の創刊号以来東儀季治であった。東儀季治は宮内省楽師の家に生まれ、鐵笛と号し、早稲田大学校歌「都の西北…」の作曲家として名高いが、雑誌の創刊者大村仁太郎と遠い姻戚の間柄で、「大村の子分」¹⁹⁾であった。大村とともに雑誌の創刊者のひとりである東京外国語学校教授山口小太郎の義弟(妹の婿)であった水谷弓彦は、『獨逸語學雜誌』の第9年第6号(明治40年2月1日発行)から東儀の後を継いだ。大正8年1月号を最後に雑誌編集から手を引き、近世文学の研究に専念した。彼は精細な実証研究で知られ、近世文学研究の先駆者とされている。著書に『列伝体小説史』『西鶴本』『草双紙と読本の研究』などがある²⁰⁾。

精華書院は大村仁太郎が自著を出版する目的で明治33年に創設した出版社であるが、山口小太郎、第一高等学校教授谷口秀太郎らと『獨逸語學雜誌』を創刊するに際しつづいた獨逸語學雜誌社に同書院を併設した。明治40年5月発行の東京書籍商組合刊行の月刊機関紙『圖書月報』(第5巻第8号)の組合記事に「加盟 牛込區矢來町二十六番地 精華書院 水谷弓彦氏 右加盟せられたり」とあるが²¹⁾、これは水谷が精華書院に入り雑誌の編集を担当した時期と一致する。また、明治44年2月現在の東京書籍商組合員名簿では、麴町區の部の4番目に「飯田町五丁目二二 精華書院 水谷弓彦」が記載されている²²⁾。獨逸語學雜誌社が精華書院を併設した頃の所在地は牛込區中町三十五番地であったが、明治39年9月に「日露戦争後本社の業務頓に増進し従來の事務所にては狹隘を告ぐるに至りしを以て」²³⁾牛込區矢來町廿六番地に移転した。しかしその後まもなく明治41年10月今度は麴町區飯田町五丁目貳拾貳番地「江戸川線飯田町五丁目地先き土手に沿ひ右へ曲る半丁」²⁴⁾の場所へ移り、更に明治45年3月には牛込區津久戸町六番地にまた移転している²⁵⁾。

水谷弓彦は「不倒翁八十年の思出話」の中で精華書院について次のよう

に語っている。

精華書院は、大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎三人の合資で、獨乙語の教科書を自著出版する小さな會社で、所謂「三太郎文法」等の版元であつた。元は東儀季治（鐵笛）がやつていたが、東儀がやめて、大村が精華書院を別の家に置いてやつて見た。しかし自分で名を出す譯にゆかず、且つ病気でやれないから、私にやつてくれないかと、谷口から話があつた。

私はかねて、出版を試みたいと思つてゐたから、資本若干を入れて經營することになつた。それから『獨乙語研究』『獨乙語初歩』等の雑誌を起し（『獨乙語學雜誌』は既に發行してゐた）、其他獨乙語初等科の書を出版し、少し當つたから、單行本『室町時代小説集』『世話浄瑠璃大全』等を出した。しかし單行本は當らなかつた。

其内に世界戦争が起り、日本が青島を攻むるやうになつて、獨逸の風向がわるく、獨乙語を習ふものが減つて、教科書も賣れなくなつた。私が引受けると、間もなく大村が歿し、それから暫くして山口も逝き、肝腎の二人が失くなつて、三太郎出版物の勢力が衰へ、収入が減じて來る。それに此社は、一年四五千圓の利益があるが、其八割五分までを印税に取り、残り一割五分を以て社員の俸給・經營費を差引いて、残ればそれを又株主全體に分配するといふ規定であつた。私は旨く往つたら、父の『三傑年譜』を出版しようと思つてやりかけたのであるが、何分『三傑年譜』が大部なもので、二千や三千の資本では出來ないし、彼是して遂に私はやめることになつた。私が廢めた後暫時やつて居たが、其後精華書院は廢業した。²⁶⁾

東京書籍商組合が編集する『書籍総目録』は、同組合が明治26年、31年、39年、44年、大正7年、12年、昭和4年に発行し、どの目録にも組合員名簿を載せているが、精華書院の名が見えるのは明治44年から大正

12年の分までで、昭和4年の目録から消えている。また明治44年版総目録の発行所別書籍目録によると、精華書院の個所には24点の書名が並ぶが、内17点までが獨逸語の教科書・辞書・参考書・翻訳書であり、残り7点のうち4点までを大村仁太郎著の児童教育書が占めている²⁷⁾。先に『明治期の兵語辞書について(二)』で取り上げた「5 獨和兵語辞書」(藤山・高田合著 明治32年11月)や、本論冒頭に掲げた『會話作文實例挿入和獨新字林』(國吉直藏著)は、当初は「獨逸語學雜誌社」の発行であったが、のち精華書院出版圖書目録に入れられている。山口小太郎が主幹となって発行した月刊雑誌『初等獨逸語研究』(創刊号明治42年11月15日発行)、及びその改題雑誌『獨逸語研究』(明治44年11月1日発行から；ただし巻号は第3年第1号)は精華書院の発行となっているし、同じく山口小太郎主幹の月刊雑誌『獨逸語初步』(明治44年11月1日創刊)も精華書院で発行している²⁸⁾。大正6年7月には『獨逸語學雜誌社編輯部編類別和獨實用辭典』(約370頁)が精華書院から出版されている。また『獨逸語學雜誌』第11年第6号(明治42年2月1日発行)には、海外書籍直輸入業務の開始の広告²⁹⁾が、精華書院内獨逸語學雜誌社の名で掲載されている。(図10, 図11)

注

- 18) 海軍有終会編『明治百年史叢書 近世帝国海軍史要(増補)』(原書房 昭和49年)409頁による。
- 19) 注7)の『獨協学園史 1881-2000』550頁, 687頁以下による。東儀季治の父季芳が大村仁太郎の父長衛と共同で共立幼稚園を創設した間柄であった(529頁)。なお『獨協学園史 資料集成』の獨協専任教員名簿では東儀季治の名前も載っていて、明治32年就任、明治39年退職で、備考欄には「音楽教師、ヴァイオリンを指導、宮廷雅楽師。獨協校歌作曲者。獨協音楽会を主催、「勇社にして快活、青春謳歌の作曲」(齊藤博)」とある(217頁)。
- 20) 『新潮日本人名辞典』(新潮社辞典編集部編集 1991)及び『水谷不倒著作集』(全8巻 中央公論社 昭和52年)参照。

謹告

獨逸語學雜誌社と弊院とは一身
 同体の出版機關に御座候へ共商
 號は専ら精華書院の方を使用致
 し居候間發行書籍の何れの名義
 に相成をり候とも代金を振替貯
 金口座へ御拂込被下候節又は事
 務上に關する件は凡て精華書院
 の方へ御用命被下度候

精華書院

振替貯金口座番號百三十六番
 電話番町一七五七七番

發行日	毎月一回發行
定價	二部四角 一冊二角
郵賃	二部四角 一冊二角
前金	二部四角 一冊二角
代用	二部四角 一冊二角
廣告料	二部四角 一冊二角

明治四十一年六月廿五日印刷
 明治四十一年七月一日發行 (第十一年第十二號)

編輯者 東京牛島本區三十三番地 水谷 昌彦 彦
 編輯者 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助
 印刷者 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助
 印刷所 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助
 發行所 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助
 發行所 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助
 發行所 東京牛島本區日吉町十番地 中 村 朝 助

図 10

◎海外書籍直輸入業開始

弊社は時勢に鑑み今般伯林及びライプテヒの書籍と特約を結び獨逸語學雜誌雜誌諸君は申すに
 及ばず其の他大方諸君の御注文に應じ獨、英、佛における文藝語學學術其の他凡て學術に關する
 原書を直輸入したる方法により成べく低廉且迅速に取寄せ御注文主の御便利を計り候間多少に拘
 らず御用命被下度候

- 一、弊社へ附書取寄せ御注文の諸君は其の書名郵數並に注文主の住所氏名等を明瞭に記し御
 申込被下度候
- 一、然る時は早速持約店へ申通り御注文の書籍を取寄せ可申候但し日數は普通にて往復三ヶ
 月を要し學尤も不至急を要する場合には三週間にて運寄致し候へ共然る場合には電報を
 以て注文し特別至急便にて取寄せ可申候間自然運賃高み候事は豫め御承知被下度候
- 一、御注文品の代價は凡て前金にて申受候事
- 一、品代金御拂込被下候節は現金爲替振替貯金等いつれにても御便利の方法によること勿論
 に候へ共郵賃代用に限る取致心不申候間豫め御斷り申上候
- 一、振替貯金へ御拂込被下候節は精華書院加入東京百三十六番へ御拂込被下度候
- 一、御注文書に關し御同合せの場合には必ず往復はかきにて願ひ上候
- 一、通て書目及び定價表は近日間製仕客圖覽諸君へ呈上可仕候

右の通

精華書院内

獨逸語學雜誌社

明治四十一年二月

図 11

- 21) 『書誌書目シリーズ② 弥吉光長監修 圖書月報 第五卷本文篇』(株式会社ゆまに書房復刊 昭和60年8月) 141頁。
- 22) 影印版『日本書誌学体系2 東京書籍商伝記集覧』(東京書籍商組合編 青裳堂書店 昭和53年4月)による。なお東京書籍商組合は明治26年6月「東京書籍出版営業組合」として発足(会員数131)、明治35年1月10日に改称した。
- 23) 『獨逸語學雜誌』第9年第2号(明治39年10月1日発行)所載の巻末広告「移轉稟告」から。
- 24) 『獨逸語學雜誌』第11年第2号(明治41年10月1日発行)表紙裏広告「移轉謹告」による。
- 25) 『獨逸語學雜誌』第14年第7号(明治45年3月1日発行)表紙裏転居広告による。
- 26) 『水谷不倒著作集 第八卷』(中央公論社 昭和52年) 214-215頁。
- 27) 復刻版『東京書籍商組合編 明治書籍総目録』(株式会社ゆまに書房 昭和60年-61年)による。
- 28) 『獨逸語學雜誌』『初等獨逸語研究』『獨逸語研究』『獨逸語初歩』などを含む日本のドイツ語雑誌とその編輯・執筆者については、上村直己熊本大学教授の『日本におけるドイツ語雑誌の歴史(1)(2)』(熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第21号:91-101頁(1986)及び第22号:93-118頁(1987))に詳細な研究がなされている。
- 29) この広告(図11)の掲載された雑誌の発行年月から推して、広告の日付「明治四十一年二月」は「明治四十二年二月」の誤植と思われる。

8

精華書院は明治35年に『和獨對照單語篇』を出している。国会図書館所蔵のものはその4版で、横7,5cm、縦15cm、厚さ6mmの小型本(図12)で、扉、まえがきなど一切なく、総頁144頁。各頁は1段組35行、1行にはほぼ1語入っているから、全体で約5千語を収めている。全体の構成は、23の項目別に分類され、各項目の中では、ローマ字見出しのABC順となっている。見出しはすべて名詞で、漢字が付けられ、ドイツ語は

図 12



Fraktur で、性別がイタリック体 *m, f, n* で示されている。項目とその占める頁数は以下の通り。

1. Naturerscheinungen 天文 1-6
2. Geographische Ausdrücke 地理 6-14
3. Die Zeit 時令 14-21
4. Körperteil 身體 21-27
5. Kleidung, Schmuck 衣服 裝飾 27-32
6. Speisen und Getränk 飲食 32-38
7. Haus (Möbel, Werkzeuge) 家屋 (家財, 器具) 38-48
8. Kaufläden, Gesellschaften, Fabriken 商店, 會社, 製造所 48-51
9. Schulhaus (Schulgeräte, Schreibmaterialien etc.) 校舎 (校物, 文具等) 51-57
10. Wissenschaften 學術 57-63
11. Spiele, Vergnügungen etc. 遊戲娛樂の類 63-66
12. Verwandtschaftsverhältnisse 人倫 66-70
13. Handel und Gewerbe 商工 70-74
14. Menschen 人類 74-84
15. Tiere 動物 84-93
16. Pflanzen 植物 93-97
17. Mineralien 金石 97-100
18. Religion 宗教 100-102

19. Militär und Marine 陸海軍 102-113
20. Öffentliche Institutionen 公廨 113-120
21. Titel 官職 121-130
22. Medicinische Ausdrücke 醫語 130-137
23. Kaufmännische Ausdrücke 商用語 137-144

すなわち陸海軍は最も多くの頁数を占める項目の一つである。

陸海軍の項目に挙げられている見出し語は、Assōseki 壓艙石 Ballas, *m.*, Bampeï 番兵 Schildwache, *f.* から始まり Zensen 前線 Vorderlinie, *f.*, Zōsenjō 造船所 Schiffbauplatz, *m.*, Werft, *f.* で終わる。全部で 369 語 (図 13)。殆ど 1 見出しにつき 1 語のドイツ語が挙げられているが、次の例のよ

図 13

(102)

Shūsai 神聖 Heiligheit, *f.*
 Shinto 信徒 Schütze, *m.*
 Shintō 神道 Shintōismus, *m.*
 Shinyaku zensho 新約全書 neues Testament.
 Shūkyō 宗教 Religion, *f.*
 Taishinkyō 多神教 Polytheismus, *m.*
 Temmō 天命 Verhängung, *f.*
 Tenpuku 天福 Segen, *m.*
 Ten 天 Himmel, *m.*
 Tenzoku 天國 Himmelreich, *m.*
 Tenjin 天人 Heilig, *m.*
 Tenjū 天使 Engel, *m.*
 Tenshukyō 天主教 Katech., *m.*
 Ten 寺 buddhistischer Tempel.
 Yasakuriano 耶穌基督 Jesus Christus.
 Yaso no totō 耶穌の徒 Apostel, *m.*
 Yasōkyō 耶穌教 Christentum, *m.*
 Yutajū 猶太人 Jude, *m.*
 Yūrei 幽霊 Geistes, Phantom, *m.*
 Zōgi 罪業 Sünde, *f.*
 Zange 鐵鉗 Beichte, *f.*
 Zennō 全能 Allmacht, *f.*
 Zenshu 齋宗 Rein-Ekte, *f.*
 Zōtōsōshū 造物主 Schöpfer, *m.*
 Zushi 佛齋 Religionärgen., *m.*

(103)

Bariki 馬力 Pferdekraft, *f.*
 Baryō 馬糧 Fourrage, *f.*
 Basō 馬糞 Pferdegedenot, *m.*
 Holan 爆彈 Bombe, *f.*
 Bōenkyō 鑿遠鏡 Fernrohr, *m.*
 Bōsō 防禦 Verteidigung.
 Bōe 短艇 Boot, *m.*
 Banderimono 軍標品 f. Semblen.
 Buretsushiki 分別式 Paradenzieh, *m.*
 Buntai 分隊 Section, *f.*; Division, *f.* (海軍の)
 Baku 武庫 Zeughaus, *m.*
 Butai 部隊 Abteilung, *f.*
 Byōin 病院 Lazarett, *m.*
 Chikei 地形 Terrain, *m.*
 Chōbatai 徵發 Requisition, *f.*
 Chōhei 徵兵 Aushebung, *f.*
 Chutai 中隊 Kompanie, *f.* (歩工兵); Eskadron, Schwadron, *f.* (騎兵); Batterie, *f.* (砲隊)
 Daijū 銃床尾 Stütentafel, *m.* [兵]
 Daishi 大隊 Battalion, *m.*
 Dangwan 彈丸 Stugel, *f.*; Geschöß, *m.*
 Danretsu 段列 Staffel, *f.*
 Dan yaku 彈藥 Munition, *f.*
 Dan yaku jūretsu 彈藥段列 Munitionsabteilung
 Daireishi 傳令使 Ordeman, *f.*
 Denshūin 電信家 Telegraphenabteilung, *f.*
 Denshūbō 傳書筒 Priester, *f.*
 Dōin 動員 Mobilisation, *f.*
 Dokku 船塢 Dock, *m.*
 Eijū 砲臺 Garnison, *f.*
 Eisantai 衛生隊 Sanitätsdetachment, *m.*
 Eki 役 Krieg, Action, *m.*; Schlacht, *f.*
 Enopei 探兵 Verstärkung, *f.*
 Enso 獲獲 Dedung, *f.*
 Enjo 探助 Hilfe, *f.*

19. Militär und Marine.

陸海軍

Assōseki 壓艙石 Ballas, *m.*
 Bampeï 番兵 Schildwache, *f.*

うに、2語以上のドイツ語を記載する場合もある。

Buntai 分隊 *Sektion, f.*; *Division, f.* (海軍の)

Chūtai 中隊 *Kompagnie, f.* (歩工兵); *Eskadron, Schwadron, f.* (騎兵); *Batterie, f.* (砲兵)

Sekkō 斥候 *Streifwache, Patrouille, f.*

外来語は次の2語のみ。

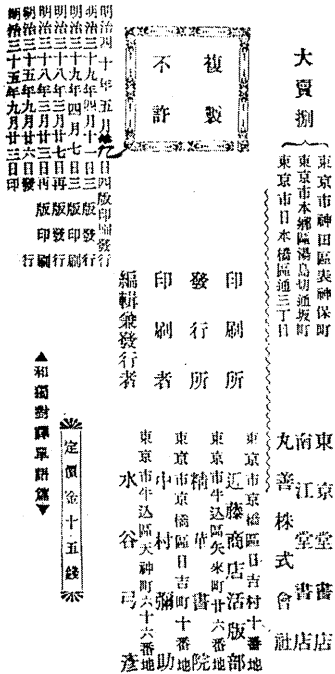
Notto 「ノット」 *Knoten, m.*

Pisutoru 「ピストル」 *Pistole, f.*

この奥付によれば、書名が「和獨對譯單語篇」となっているが、初版は

明治35年9月26日発行で、明治38年3月再版、同39年4月3版、明治40年5月4版とあるから、かなり売れていたことが判る(図14)。定価は15銭。編輯兼発行者は水谷弓彦となっているが、彼の経歴にはドイツ語学習の跡が見られないし、初版の明治35年当時は彼は大阪毎日新聞記者であったのであるから、名前だけの編輯兼発行責任者である。『獨逸語學雜誌』第5年第1号(明治35年10月1日発行)に掲載された新刊書『和獨對照單語篇』の広告には「本書ハ本社藏版ノ獨逸會話教科書中單語ノ部ヲ大ニ増補改訂シタルモノニシテ天文地理等二十三部ニ別チ羅馬綴ヲ以テ母字順ニ配列セリ每語皆是レ須

図 14



知ノモノナレバ以テ會話ノ資ト爲スベク以テ作文ノ料ト爲スベシ蓋シ斯學研究者ノ好伴侶ナリ」とあり、獨逸語學雜誌社の『獨逸會話教科書 全』(明治35年9月当時第三版 正価六拾錢)は高田善次郎と学習院教授の辻高衡の共著である。従ってこの『和獨對照單語篇』の實際の編輯者は高田と辻の兩名と見てよいであろう。